笑うなら日曜の午後に

中原まこと

|著者| 中原まこと　北大農学部卒。漫画原作者としては、『ソーギ屋ケンちゃん』『マジデカ』『すずなり横丁道楽商店街』『サラかん』（いずれも高井研一郎／画）、『銀のゴルフ』『中部銀次郎の第一打』（いずれも政岡としや／画）、『ピンフラッグ』（蝦名いくお／画）、『千里の道も』（ペンネームは大原一歩、渡辺敏／画）など。著書に『いつかゴルフ日和に』がある。

笑うなら日曜の午後に
中原まこと
© Makoto Nakahara 2012

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2012年3月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277215-0

目次

第1章　迷走台風　7
第2章　研修生　31
第3章　身の上話　54
第4章　プロテスト　71
第5章　墓参り　107
第6章　キャディ　138
第7章　勝ちパターン　157
第8章　茶店　176
第9章　胡麻塩頭の男　192

第10章　逡巡（しゅんじゅん）　211
第11章　ルール　229
第12章　葛藤　243
第13章　告白　260
第14章　再現　273
第15章　ニギリ　290
第16章　目の中の色　308
第17章　ロッカールーム　327
第18章　行き先　347

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章

笑ってなら土曜の午後に

中原まこと

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第1章　迷走台風　7
第2章　研修生　31
第3章　身の上話　54
第4章　プロテスト　71
第5章　墓参り　107
第6章　キャディ　138
第7章　勝ちパターン　157
第8章　茶店　176
第9章　胡麻塩頭の男　192

第10章　逡巡（しゅんじゅん）　211
第11章　ルール　229
第12章　葛藤　243
第13章　告白　260
第14章　再現　273
第15章　ニギリ　290
第16章　目の中の色　308
第17章　ロッカールーム　327
第18章　行き先　347

笑うなら日曜の午後に

第1章　迷走台風

1

コンビニを出た途端、生暖かい風が巨大な塊(かたま)りになって、大滝清一(おおたきせいいち)に襲い掛かってきた。

ガタイのいい大滝でさえ一瞬バランスを失うほど、烈(はげ)しい風に、開きかけたビニール傘の骨がグニャリと折れ曲がった。大粒の雨が容赦(ようしゃ)なく体を濡(ぬ)らし、時おり街路樹から叩き落された小枝までぶつかってくる。

九州や四国沖の海上をウロウロと何度も方向を変えて北上してきた迷走台風が、ついに伊豆半島に上陸しようとしているのだ。

「もうちょっと、待ってくれよ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

どこかモアイ像を思わせるいかつい顔に不安の色を浮かべ、天を仰いで大滝は祈った。

台風の上陸があと半日遅れてくれれば、明日の日曜日に予定されているゴルフトーナメント最終日が中止になる。

そうすれば、三日目が事実上の最終日となり、そこで最上位に来た選手が優勝者になる。

そんな情報が載ったスポーツ紙が、大滝のぶら提げているビニール袋の中にある。缶ビール二本と、照り焼き弁当と一緒に。

コンビニの店先で、しばらく様子を見ていたが、風雨はさらに烈しくなるばかりだった。

大滝は意を決してビニール袋を両手で抱え、雨に濡れた歩道をダッシュで駆け出した。滞在先のビジネスホテルまでは五分足らずの距離なのだが、ズボンのすそがまとわりついて、思うように走れない。

秋の半ばの土曜の夕暮れ時。本来なら空はまだまだ明るいはずが、重苦しいまだら雲にすっかり蓋(ふた)をされて、すでに宵闇が訪れたように暗い。吹き抜ける不穏な風に、電線が悲鳴のような音を立てる。早くも点灯したホテルのネオンが雨の向こうに見え

たとき、不意に一台の白いベンツが、大滝に幅寄せするように止まった。
「危ないじゃないか」
半ばおびえ、半ば怒りをにじませて大滝は立ち止まり、振り返った。
後部座席のウィンドウが音もなく降りて、見覚えのある男の顔が現れた。
大滝は自分のもっとも惨(みじ)めな場面を目撃されたようで、うろたえながら手に持っているものを背中に隠したが、すでに手遅れだった。
「先輩。コンビニ袋なんかぶら提げて、何してるんですか」
「久世(くぜ)君……」と言いかけて、慌てて大滝は「久世プロ」と言い直した。それは、大滝が今一番会いたくない男だった。
昔、大滝がゴルフ場の研修生として修業していたころの後輩で、大滝を追い越して先にプロデビューした男。すでに、トーナメントで何度も優勝を重ね、その端正な顔立ちもあいまって、男子プロゴルフ界随一の人気を誇る若き実力者。そして今週も、トップの大滝にわずか2打差。虎視眈々(こしたんたん)と、逆転優勝を狙っている最大の敵。久世輝彦(てるひこ)。
「ダメですよ。初優勝に王手をかけてる先輩が、コンビニ弁当で独りメシなんて」
ドアを開けて降り立った久世は、強引に大滝の腕を取り、車内に引きずり込んだ。

見た目は華奢だが久世の力は思いのほか強く、大滝は尻餅をつくように後部座席に腰から沈んだ。

「いや、ホテルはもう、すぐ目の前だから」

抗おうとする大滝の手に、久世は上質のタオルを押し付けてきた。

「風邪引きますよ」

濡れた髪を拭いながら、大滝は小さな声で礼を述べた。拭き終わると、すぐに車から出ようとした。だが、久世の手が大滝の肩をしっかりと押さえ込んでいた。

「先輩、せっかく伊豆半島まで来てるんだから、海の幸なんかどうですか。でも、今週はもう食い飽きてるかもしれないから」と、言葉を切ると、久世は運転しているマネージャー兼キャディの若者に「ちょっと遠いけど、旨い焼肉屋があったろ」と、命じた。

「うす」と返事すると、若者はナビをセットした。

「いいよ。遠慮しとくよ」

大滝が大きな体を縮めるようにして断るより早く、ベンツが静かに走り出した。

「先輩、たまにはおごらせてくださいよ」

久世は、言いながら大滝のビニール袋の中からスポーツ紙をするりと抜き取った。

たちまち、大滝の耳が真っ赤になった。

「いや、別に……自分の記事が載ってるかどうか気にして買ったわけじゃないんだ。ただ、珍しく新聞記者にインタビューなんかされたもんだから、そのとき、しどろもどろで、何を喋ったかさっぱり記憶にないもんだから、どんな扱いになってるのかなと思って……」

そんなことを口走りながら、大滝が焦(あせ)って奪い返そうとしたが、久世はあえて無視するようにスポーツ紙を大きく開いた。

一面はヨーロッパのクラブチームで活躍する日本人サッカー選手がゴールを挙げたことを、でかでかと取り上げていた。二面からしばらく野球ネタが続き、七、八枚ページをめくった辺りに、ようやくゴルフ欄がある。大きく扱われているのは新人同士がトップ争いを演じている女子ツアーで、男子トーナメントは片隅に追いやられていた。

『無名の大滝大健闘』

ほんの申し訳程度の小さな見出しを見つけると、久世の涼やかな瞳がかすかに曇った。

「スポーツ紙の記者って、どうしてこうもワンパターンなんだろ。大滝先輩が、ツア

ーの仲間内でどれだけ高く評価されてるかなんて、何にも知っちゃいないんだから」

それが本心なのか、おためごかしなのか。大滝には、久世の本心がよく分からない。

そもそも道端でピックアップしたのだって、何か意図があってのことかもしれない。明日の戦いを前に、プレッシャーを掛ける目的で近づいてきた、とも考えられる。いや、久世の実力なら、そんな策を弄さなくても、容易に逆転勝利を狙えるはずだ。ようするに、たまたま偶然、ばったり出会ったというだけのことなのだろう。なにしろトーナメントの期間中は、小さな街に全選手が滞在しているのだから、そんなことが起きても不思議ではない。どちらにしても、こうしてベンツの後部座席で二人並んでいることが、大滝には息が詰まるほど居心地の悪いことだった。

大滝の視線を感じて、久世がスポーツ紙から顔を上げてこちらを向いた。

大滝は慌てて窓の外に目を転じた。雨はますます烈しく吹きつけ、木々が悲鳴を上げながら揺れている。台風は、すでに上陸し始めているのかもしれない。

2

滞在先のビジネスホテルを出る前、大滝は何度もテレビのチャンネルを変えた。どの局を見ても、お天気キャスターは同じ予報を伝えていた。

「迷走台風は、今夕伊豆半島先端をかすめ、明日日曜日の未明には、太平洋上に抜けるものと思われます」

かすめるだけじゃダメだ。太平洋に抜けるなんて、もってのほかだ。頼むからちゃんと上陸してくれ。上陸して、居座ってくれ。伊豆半島を沈めるほどの大雨を降らせてくれ。木々を根こそぎなぎ倒すぐらい暴風を吹かせてくれ。そして、明日のトーナメント最終日を、中止にしてくれ。

大滝はテレビを消して、立ち上がった。かび臭いホテルの一室を出た。廊下のコーナーに自販機がある。いくぶん割高な値段設定になっている自販機を無視するように、大滝はエレベーターに乗り込み、一階に降りると、キーをフロントに預け、ビニール傘を借りて外に出た。

不穏な風と、時折叩きつける大粒の雨の中、大滝は傘を斜めに差してコンビニに向かいながら、思った。

天気予報なんか、当てになるもんか。第一、迷走という冠（かんむり）が付いてるほどの台風じゃないか。最後のおまけに、もう一度気まぐれを起こしてくれたって、バチは当た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com